

第1章 戦場

中国からの引き揚げ 終戦、満蒙開拓団を待っていた引き揚げの苦難

滝沢祇董さんのお話から

○満蒙開拓青少年義勇軍
昭和十年代に国策として
満州に送られた若年の農
業移民。

○開拓団 満州事変後、
国策により満州に送り出
された農業移民集団で、
合計二十七万人程が入植
した。終戦後は、ソ連の
参戦で取り残され、多く
の犠牲者をだして日本に
帰国した。

○種馬 馬の繁殖・改良
のために飼う雄馬。

○引き揚げ 終戦にとも
なう、海外在留の日本人
の帰国のこと。

○満州鉄道 長春・旅順
間の鉄道や鉱山・製鉄な
どを経営するために、明
治三十九年（一九〇六
年）、大連に設立された半

私は昭和十七年（一九四二年）に志願して満州に行き、満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所に入
り、そこで三年間、農事教育と軍事教育を受けました。

当時、服は国防服や戦闘帽など、支給されるものを着ていました。食事はわりと何でもあり
ましたが、米だけでは足りなかつたので豆御飯や麦御飯など、いろんなものを混ぜて食べまし
た。あとは麦粉を練って、砂糖はあまりありませんでしたが、油で揚げてかりんとうみたいにな
ものを作ったりしました。また、果物もありませんでしたが、正月には小さなみかんが一個配
られました。

昭和二十年六月に訓練所を卒業しました。八月が終戦です。一般開拓団へ行ったのは実
質二か月間でした。私が行ったときは、開拓団で種馬の担当をしていました。

終戦は満州で迎えました。村に通信手段がなかつたので二日ぐらい遅れて終戦を知りまし
た。八月十九日になって「引き揚げてこい。」という伝令が入って、引き揚げることになつた
のですが、そこで現地の人々の襲撃にあいました。夜中に鉄砲で撃たれたのです。終戦後の八月
二十日ころのことでした。

白露戦争に勝った日本は満州・満州鉄道を支配して、その沿線もすべて日本の領土にしてし
まい満州国を建国しました。そして、満州国に住む中国人たちが耕した畑地を、日本人が取り
上げてしまったのです。だから、土地を取り上げられて苦勞した現地の農家の人たちは、私た
ち日本人に対して敵意があつたのだと思います。

官半民の国策会社。正式名称は南滿州鉄道株式会社。

○滿州国 昭和六年（一九三一年）に起きた滿州

事変の際に、日本が中国東北地方（滿州）を占領して建国した国。表紙裏

地図

○銃器 小銃、拳銃、機関銃などの総称。

さらに、滿州は寒いところなので、中国人も山に行つて木を切つて燃料にするのですが、その燃料も、「これは日本人の山だぞ。」ということで中国人が切つた木を取り上げたり、ロープやまさかりなどを取り上げたりしました。彼らはしかたなく、それらをお金を出して買い取りに来るのです。

そういうことを義勇軍はやっていたので、終戦になつて、銃器を持っている中国人たちが、かたき討ちに来るのは当然なんです。私は本部にいたのですが、三部落あつた仲間を全部本部に集め、襲撃に備えて、引き揚げることになりました。

最初の引揚先で中国兵に武器を取り上げられ、次の引揚先に向かう途中で、塹で囲まれた開拓団に立ち寄つたところを、私たちの物資を狙つた、中国人の一团に襲われたのです。相手は二、三百人くらいでしょうか。こちらは百人にも満たない女性と子どもみの集まりです。当時の開拓団の男性はほとんど召集されていたからです。その集団を私たち十六、十七歳の青少年義勇軍が守っているという状態で、鉄砲を持つている者はいません。五、六十メートルの距離から撃たれるから、仲間がバタバタと撃ち



イメージ図

青少年義勇軍の訓練

終戦、滿蒙開拓団を待っていた引き揚げの苦難

○長春 満州国の建国に際し首都となり、新京と改称。表紙裏地図
○兵舎 兵隊が寝たり食べたりするなど、日常生活をする建物。
○配給 米や味噌、砂糖等の食へ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。

殺されました。その時は十二、三人死にました。もう全滅してしまうと思い、無我夢中で相手に石を投げようとしたら、今度は私が撃たれました。焼いた鉄棒が体の中を抜けていくような痛さで、体から血が吹き出しました。直後に中国人が乱入してきました。

足手まといになって逃げられないということで、赤ちゃんや小さい子どもたちは犠牲になりました。本当に地獄のような状態でした。私がお助かったのは、体が小さかったからです。現地の中国人が私を殺しに来たのですが、一緒にいた女性の人が、「子どもだよ、助けてやってください。」と泣きながら頼んでくれたのです。その後、負傷して飢えて虫の息の状態だったところを朝鮮人のお母さんが助けてくれ、一週間ほどかくまってくれました。そして、どうにか訓練所にたどり着き、引き揚げということで、そこから今の長春に連れていかれました。

長春では新京市菊水町という航空隊の兵舎に難民として收容されました。このときには傷はほとんど治っていましたが、収入があるわけでもないし、配給もないので、それぞれが働きました。私も倉庫で働いていました。



イメージ図

大地を耕す開拓民

○シラミ シラミ目の昆虫の総称。吸う口を持ち、人間や家畜の血を吸う害虫。体は小さくてひらべったい。腹部は大きく、頭部・胸部は小さく、羽はない。

石炭を盗んで、町へ持って行って売ることもありました。

戦争に負けて、食料がなくなつて、そこからが大変だったので。栄養失調になると、シラミがひどくて大変でした。この頃は、食糧不足で食べものの奪い合いもありましたが、中にはいい人もいて、自分ではこんなに食べられないから半分あげるといふような仲間もいました。そんないい人も、二月の寒い時に凍死してしまいました。私はその仲間の頭をかかえて泣きまじした。終戦後、一年間の難民生活を過ごしましたが、つらかったのはやはり仲間の死です。本当にひどかったのです。長春だけでも、二万人以上の人が死ぬだろう、餓死するだろうと言われていました。

遺体を荷車に積んでいくと、零下三十度以下の寒さですから、枯れ木が折れるように、車が行った後に手や足の指が落ちていふようなことがありました。

また避難所は建物はありませんが、火を起こすものはないのです。暖房もないところにみんなを寄せ合つて生活してました。ですから、凍死してしまふのです。私のそばで一緒に寝ていた友人が、次の日になつたら冷たくなつて死んでいたこともありました。

最後になりますが、戦争の悲惨さというのは経験した人ではないと実感はわからないかもしれせん。だから、みなさんにはできるだけ戦争というものを書物なり映像なりで見知つてもらつて、悲惨さというのを感じてもらいたいです。あとは忘れないことが大切です。あのような悲惨なことはこれから、二度と起こしてはいけません。

DATA

平成21年度厚別区平和事業
聴き取り
・平成21年12月9日
・サンピアモールFMDドラマシテスタジオ



滝沢祇董(たきざわ・まさよし)さん

・昭和3年(1928年)生まれ
・札幌市厚別区在住

終戦、満蒙開拓団を待っていた引き揚げの苦難